

四又 《よまた》 の百合 《ゆり》

宮沢賢治

青空文庫

「正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたりになってこの町にいらつしやるそうだ」

こう言う語いごがすきとおった風といっしよにハームキヤの城しろの家々にしみわたりました。みんなはまるで子供こどものようにいそいそしてしまいました。なぜなら町の人たちは永ながい間どんなに正徧知しょうへんちのその町に来るのを望のぞんでいたかしのたないのです。それにまた町からたくさんの人たちが正徧知しょうへんちのそこへ行つてお弟子でしになつていたのです。

「正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたりになつてこの町にいらつしやるそうだ」

みんなは思いました、正徧知しょうへんちはどんなお顔いろでそのお眼めはどんなだろう、噂うわさの通り紺こんいろの蓮華れんげのはなびらのような瞳ひとみをしていなさるだろうか、お指ゆびの爪つめはほんとうに赤しやく銅どういろに光るだろうか、また町から行つた人たちが正徧知しょうへんちとどんなことを言いどんななりをしているだろう、もうみんなはまるで子供こどものようにいそいそして、まず自分の家をきちんととのえ、それから表へ出て通りをきれいに掃除そうじしました。あつちの家からもこつちの家からも人が出て通りを掃はいております。水がまかれ牛糞ぎゆうふんや石ころはきれいに

とりのけられ、また白い石英せきえいの砂すなが撒まかれました。

「正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたりになつてこの町にいらつしやるそうだ」

もちろんこの噂うわさは早くも王宮おうきゆうに伝つたわりました。

「申し上げます。如來にょらい正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたりになつてこの町にいらつしやるそうでございます」

「そうか、たしかにそうか」王さまはわれを忘れて瑪瑙めのうで飾かざられた王座おうぎを立たれました。
「たしかにさようと存ぞんぜられます。今朝けさヒームキヤの向むこう岸ぎしで説法せつぽうのをハムラの二人の商しょう人にんが拝おがんで参まいつたと申しします」

「そうか、それではまちがいあるまい。ああ、どんなにお待ちしただろう。すぐ町まちを掃除そするよう布令ふれいを出せ」

「申し上げます。町はもうすっかり掃除そうじができてございます。人民じんみんどもはもう大おお悦こびでお布令ふれいを待たずきれいに掃除そうじをいたしました」

「うう」王さまはうなるようにしました。

「なお参まいつてよく粗勿そそのないよう注意ちゆういいたせ。それから千人の食事しょくじのしたくを申し

伝えてくれ」

「かしこまりました。大膳職はさつきからそのご命を待ちかねてうろうろうろ廚の中を歩きまわっております」

「ふう。そうか」王さまはしばらく考えていられました。

「すると次は精舎だ。城外の柏林に千人の宿をつくるよう工作のものへ言ってくれないか」

「かしこまりました。ありがとうございます。思召でございます。工作の方のものどもはもう万一ご命令もあるかと柏林の測量にとりかかっております」

「ふう。正徧知のお徳は風のようにみんなの胸に充ちる。あしたの朝はヒームキヤの河の岸までわしがお迎えに出よう。みなにそう伝えてくれ。お前は夜明の五時に参れ」

「かしこまりました」白髯の大臣はよろこんで子供のように顔を赤くして王さまの前を退りました。

次の夜明になりました。

王様は帳の中で総理大臣のしずかにはいつて来る足音を聴いてもう起きあがっていられました。

「申し上げます。ただいまちようど五時でございます」

「うん、わしはゆうべ一晩ひとばんねむらなかつた。けれども今朝けさわしのからだは水晶すいしょうのようになややかだ。どうだろう、天気は」王さまは帳とばりを出てまっすぐに立たれました。

「大へんにいい天気でございます。修彌山しゆみせんの南側みなみがわの瑠璃るりもまるですきとおるように見えます。こんな日如來にょらい正徧知しょうへんちはどんなにお立派りつぱに見えましょう」

「いいあんばいだ。街まちは昨日きのうの通りさっぱりしているか」

「はい、阿耨達湖アヌダプナの渚なぎさのようでございます」

「齋食ときのしたくはいいか」

「もうすっかりできております」

「柏林かしわばやしの造営ぞうえいはどうだ」

「今朝けさのうちには大丈夫だいじょうぶでございます。あとはただ窓まどをととのえて掃除そうじするだけです」

「そうか。ではしたくしよう」

王さまはみんなを従したがえてヒームキヤの川岸かわぎしに立たれました。
風がサラサラ吹き木ふの葉はは光りました。

「この風はもう九月の風だな」

「さようでございます。これはすきとおったするどい秋の粉でございます。数知れぬ玻璃の微塵のようでございます」

「百合はもう咲いたか」

「薔はみんなできあがりましてございます。秋風の鋭い粉がその頂上の緑いろの

かけ金を削つて滅してしまします。今朝一斉にどの花も開くかと思われます」

「うん。そうだろう。わしは正徧知に百合の花をささげよう。大蔵大臣。お前は

林へ行つて百合の花を一茎見つけて来てくれないか」

王さまは黒髯に埋まつた大蔵大臣に言われました。

「はい。かしこまりました」

大蔵大臣はひとり林の方へ行きました。林はしんとして青く、すかして見ても百合

の花は見えませんでした。

大臣は林をまわりました。林の陰に一軒の大きなうちがありました。日がまつ白に照

つて家は半分あかるく夢のように見えました。その家の前の栗の木の下に一人のはだし

の子供がまつ白な貝細工のような百合の十の花のついた茎をもってこつちを見ていまし

た。

大臣^{だいじん}は進^{すす}みました。

「その百合^{ゆり}をおれに売れ」

「うん売るよ」子供^{こども}は唇^{くちびる}をまるくして答えました。

「いくらだ」大臣^{だいじん}が笑^{わら}いながらたずねました。

「十銭^{せん}」子供^{こども}が大きな声^{こゑ}で勢^{いきおい}よく言^いいました。

「十銭^{せん}は高いな」大臣^{だいじん}はほんとうに高いと思^{おも}いながら言^いいました。

「五銭^{せん}」子供^{こども}がまた勢^{いきおい}よく答^{こた}えました。

「五銭^{せん}は高いな」大臣^{だいじん}はまだほんとうに高いと思^{おも}いながら笑^{わら}って言^いいました。

「二銭^{せん}」子供^{こども}が顔をまっ赤^{さか}にして叫^{さけ}びました。

「そうか。一銭^{せん}。それではこれでいいだろうな」大臣^{だいじん}は紅宝^{ルビー}玉^{くび}の首^{くび}かざりをはずしま

した。

「いいよ」子供^{こども}は赤^{さか}い石^{いし}を見てよろこんで叫^{さけ}びました。大臣^{だいじん}は首^{くび}かざりを渡^{わた}して百合^{ゆり}

を手^てにとりました。

「何^{なに}にするんだい。その花^{はな}を」子供^{こども}がふと思^{おも}いついたように言^いいました。

「正徧知しょうへんちにあげるんだよ」

「あつ、そんならやらないよ」 子供こどもは首くびかざりを投げな出しました。

「どうして」

「僕ぼくがやろうと思つたんだい」

「そうか。じゃ返かえそう」

「やるよ」

「そうか」 大臣だいじんはまた花を手にとりました。

「お前はいい子だな。正徧知しょうへんちがいらつしやつたらあとについてお城しろへおいで。わしは

大蔵おくらだいじん大臣だいじんだよ」

「うん、行くよ」 子供こどもはよろこんで叫さけびました。

大臣だいじんは林をまわつて川の岸きしへ来ました。

「立派りっぱな百合ゆりだ。ほんとうに。ありがとう」 王様おうさまは百合ゆりを受けとつてそれからうやう

やしくいただきました。

川の向むこうの青い林のこつちにかすかな黄金きんいろがぽつと虹にじのようにのぼるのが見えま
した。みんなは地にひれふしました。王もまた砂すなにひざまずきました。

二億^{おくねん}年ばかり前どこかであったことのような気がします。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1993（平成5）年6月20日改版71版発行

入力：薦田佳子

校正：平野彩子

2000年8月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

四又 《よまた》 の百合 《ゆり》

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>